

HSK

No. 125



ふきのとう 文庫だより

≡ 五十周年記念号 ≡

昭和48年1月13日第三種郵便物承認

HSK通巻番号596号

発行 令和3年11月10日

毎月10日発行 一部100円

編集 〒060-0006

札幌市中央区北6条西12丁目8番3

公益財団法人ふきのとう文庫

電話 (011) 222-4839

FAX (011) 222-4800

発行人 北海道障害者団体定期刊行物協会

細川久美子

「自立的市民活動拠点」としてのふきのとう文庫

公益財団法人ふきのとう文庫 代表理事 高倉 嗣 昌

二〇二〇年度を「ふきのとう文庫」の活動五十周年とした考え方とそれに向けての取り組みについては、文庫だより一二三号の一頁に書かせていただきましたが、「コロナ禍」で行事・事業の殆どを見送らざるを得ず、長年ご支援をいただいている「北海道新聞社会福祉振興基金」の増額配分金を活用し、文庫だより一二五号「活動五十周年記念号」として最小限形にすることができました。

その第一頁を飾る記事として、百周年を目指す抱負を力強く述べなければならぬでしょう。

めざすは、民間の力による安定した市民活動拠点づくり、そしてその軸になるのが、「物理的に留まらない文化的バリアフリー図書館」ということです。

「市民活動拠点」という大上段に構えた言葉を使いました。

子どもを主人公とした市民活動拠点たりうるものとしては、学校や図書館を除いても、主に社会福祉施設、子育て支援組織などがあげられます。当文庫の活動もそうした施設や組織との結合を追求する行き方があったかもしれません。しかし、小林創設理事長の初志をふまえるならば、図書館が最も合致していると評価し、図書館路線をとって来しました。

「市民活動」ということになりますと、単に個々の子どもの幸せを希求するに留まらず、社会との結合というグローバルな視野の下での活動を意味するように思います。特に当文庫の活動は、図書館活動を通じて布の本や大きな字の本をバリアフリーの形をとりつつ世に広めていこうとする目的を常に持っています。そうした意味で当文庫の活動は「市民活動的要因」を強く帯びていると言えます。

ところで現在日本にある約二十の私立の子ども図書館を見ますと、その組織基盤は、大学、企業、宗教法人、財団法人で殆ど占められておりますが、その中の大多数が固定した強固な支援組織に支えられております。

ひるがえって当文庫を見ますと、現在「赤い羽根共同募金会」以外には、経済的に運営を左右するほどの力な支援組織を持っておりません。

他方、当図書館は図書館法で公的補助が禁止されている私立図書館ですが、何らかの公的補助をもらって運営していると誤解されている方々も少なくない状態です。

当文庫の活動は三桁に達する数のボランティアによって支えられており、図書館活動、布の本・大きな字の本の製作、イベント開催などはスムーズに進めることができますが、特に力仕事・汚れ仕事・対外的な仕事などをこなして下さる方は大変少なく、人力のアンバランスが深まりつつあります。これを解決するためには、一定の報酬を支払い人を雇うことでカバーしていくしかありません。現状では少なくとも常勤的職員二名が必要ですが、増員は経済面で夢のような話です（現在はパート一名）。

当文庫の活動を「市民活動」として高めていく目標を示しましたが、文庫だよりを通じて再三申し上げてきた懸案事項の解決こそが急務なのです。率直なところは、「コロナ禍」の下経済活動停滞も加わって、今後の発展どころか存続すらおぼつかない状態です。

記念号の一頁目として竜頭蛇尾になってしまいました。力不足で申し訳ありません。どうか今後とも一層のご支援をお願いいたします。

ふきのとう文庫

五十周年によせて



札幌市長 秋元 克広

昨年十一月をもちまして、ふきのとう文庫が記念すべき五十周年という節目を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

高倉代表理事をはじめ、ふきのとう文庫の皆様におかれましては、一九七〇年に故小林静江様が身体障がい児向けの子どもの文庫を開設されて以来、「すべての子どもに本の喜びを！」という理念のもと、布の本・拡大写本の制作や、ふきのとう子ども図書館の運営など、多岐にわたる活動を続けてこられました。また、その活動は全国的にも評価され、内閣総理大臣賞をはじめとして多くの賞を受賞してこられました。皆様、この札幌の地において、半世紀という長きにわたり、心から子どもたちの幸せを願い、本の喜びをもたらし続ける活動をされておりますことに、深く敬意を表します。

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大から一年と半年以上が経過しましたが、今もなお、わが国の社会・経済全体が大きな影響を受けており、子どもたちの日常も制限を受けております。皆様におかれましても、感染症の影響による図書館の休館や「おはなし会」の休止など、制約が生じている中、工夫を凝らして活動を継続され、多くの子どもたちに本を通じて夢と希望を与えていただいております。最大限のご理解とご協力に、この場をお借りして厚くお礼を

申し上げます。

札幌市は、来年二〇二二年に市制施行から百周年という大きな節目を迎えます。札幌のまちが、次の百年も魅力あふれる都市であり続けるためには、子どもたちが夢と喜びを抱いて健やかに育ち、安心して暮らし続けることができるまちづくりが不可欠となります。本市といたしましては、感染症がもたらした新たな日常に対応しながら、市民誰もが互いに人格と個性を尊重し、支え合う「共生社会の実現」に向け、障がいの有無に関わらず地域で安心して生活していくことができるよう、より一層取り組んでまいります。これまであたたかな想いのもと、多くの子どもたちに笑顔をもたらし続けてこられた皆様におかれましては、どうか引き続きのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、子どもたちに本を通じた喜びが末永くもたらされますことと、ふきのとう文庫の皆様がますますのご健勝、ご活躍を心より祈念いたします。私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

「ふきのとう文庫の歴史に学ぶ」

北星学園大学名誉教授

元財団法人ふきのとう文庫理事

忍

博次

ふきのとう文庫が開設五十周年を迎えるという。ふきのとう文庫と言えば布の絵本で有名である。今も布の絵本が制作や本の読み聞かせな

どのサービス提供はボランティアの役割である。新自由主義の競争社会での持続的発展は容易ではなかったであろう。五十周年の努力に心からおめでとうと言いたい。

ふきのとう文庫が活躍を始めた頃、私は新しく発足した北星学園大学社会福祉学科の新米教員であった。戸惑う毎日で自分に言い聞かせたことが三つある。一つは講義担当科目の「障害者福祉論」の無知を克服すること。これが仕事だから当たり前のことである。しかし自信がなかった。第二に援助の体系を考えると、他の社会問題とどう関わっているか深く洞察し、「見える化」を心がけること。第三にボランティアとして参加し、活動が期待されているクリスチヤンセンター家庭福祉相談室の「障がい幼児母子通園事業の理念」を母親との関係でソーシャルワークを考えることであった。クライアントは幼児だけではなく、絶えず母親の嘆きを視野に入れることであった。通園時には、子どもとは別に母親の集団カウンセリングを行った。しかも、家庭相談室は全てボランティアの手で運営した。

ふきのとう文庫と私の相談室はボランティアの士気と多様な知識で困難を切り開いてきた同じような経験があるようだ。ボランティアの中には、教育学、心理学、保育、文学を学んだ人がいて、知識の相互作用が自然に行われていた。また母親のカウンセリングは幼児の環境調整にもなったし、親子のニーズの理解になった。また親子、家族、取り巻く地域の理解はニーズの重層化を理解させてくれ、包括支援の理解に繋がっていたように思う。多分ふきのとう文庫も同じような経験を持つであろう。お互いにこの

発展を持続できればボランティア活動は福祉社会の促進に役立つ。経験を共にするところと手を繋ぎたい。そして明るい未来を築きたい。ふきのとう文庫のエネルギーと実践に勇気づけられた。ありがとう。

札幌市立中央小学校

弱視通級指導教室「ひとみの教室」 下村 愛

このたび、「ふきのとう文庫」が創設五十周年を迎えられますことを心からお慶び申し上げます。

「ふきのとう文庫」の皆様には、長きにわたる「ひとみの教室」に通う子どもたちのためにたくさんの方の拡大写本を制作、寄贈していただきました。おかげさまで、本教室の図書コーナーは児童文学を中心に、幼児から中学生、そして大人までが楽しめる内容で充実しております。学校の朝読書用に残り、長期の休み前には読書感想文のために借りたりと、本教室は拡大写本を気軽に手に取ることができる市内でも大変恵まれた施設になりました。

また、進級・進学時には一人一人に「漢字の本」をプレゼントしていただき、子どもたちの「学び」を支えてくださったこと、感謝の念に堪えません。子どもたちは毎年とても楽しみにしており、本を受け取った時には嬉しさとともに「今年も一年頑張っていこう！」と気持ちを新たにしているようでした。内容につきましても、書き順や漢字のつくりがわかりやすく示されているだけでなく、紙の材質や本の角の処理など細部に至るまで目に優しい工夫が凝らされ、見えにくさを抱える子どもたちの視点で制作してくださったのが伝わってきます。これもボラ

ンティアスタッフの皆様が日頃から子どもたちのことを考え、ふれあいを大切にしてくださっているからこそ成せるのだと思います。

特に、拡大写本グループの山本様との交流は、本教室が創成小の閉校に伴って中央小に移転した十八年ほど前に遡ります。当時から親子レクリエーションや節目ごとの集いなど、数々の教室行事に御参加いただきました。絵本の読み聞かせは恒例となり、多くの子どもたちが、お話が始まると同時に物語の世界に引き込まれていました。普段なかなか一堂に会する機会はありませんが、行事などで山本様も交えて楽しいひと時を過ごしたことは、子どもたちにとっても、また義務教育を終えた卒業生たちにとっても、心温まる思い出になっているようです。

昨今、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しております。コロナ禍においてICTの導入・運用も加速しました。時代は変わっていきませんが、「不易」な紙の本の良さを子どもたちに伝えていきたいと思っております。そして何より「ふきのとう文庫」の皆様との関わりがこれからも続いていくことを願っております。

最後になりましたが、これまで本教室の子どもたちの成長を見守り、支え続けてくださった山本様、さらには、関係する皆様の多大な御尽力に感謝し、「ふきのとう文庫」の今後ますますの御発展をお祈り申し上げます。

※「ひとみ教室」は札幌市唯一の弱視の通級指導教室として、札幌市立中央小学校に設置されています。今年度(令和三年)は十一名の小・中学生が、普段は自分の地域の学校で生活しながら、週に一回程度の個別指導を受けに中央小に通っています。

上半期を終えて

コロナ禍の中、上期の子ども図書館は通常九十日ほどの開館日がありますが、四十七日しか開館できずに終わりました。しかし、経常経費(管理費)はそれほどに必要でさほどの支出減にはなりません。布の布や拡大写本の作成グループの活動は緊急事態宣言などで自粛する期間も多くありました。そのため事業費は減となりました。

収入は賛助会員の皆さまの支援も一昨年および昨年程度ありまして、下期において何とか目標額に到達できるかと思っております。一方、寄附金については、思うように集まっています。当文庫の事業に賛同していただき、更なる寄附金をいただけるようにつとめていきたいと思っております。

補助金は、毎年、赤い羽根共同募金からの手厚い支援を頂いております。また、北海道新聞社会福祉振興基金からの例年通りの補助もありました。新規では、日本コープ共済地域ささえあい助成、さつぽろコープ地域福祉活動助成の補助を受けることが出来、予算以上の収入となっています。

今年度下期は全国的なコロナウィルスの感染縮小を受けて、活発な事業活動が出来るかと考えています。収入の増、支出の縮減を図りながら頑張っています。

上半期 収支実績

令和3年度9月末		単位千円		
	予 算	3年9月末	前年同月	前前同月
収入の部				
賛助会費	2,600	1,938	2,266	1,966
寄付金等	3,000	714	1,435	661
助成金	1,500	2,050	1,600	1,500
事業収入	1,600	236	542	1,200
雑収入				
合 計	8,700	4,938	5,843	5,327
支出の部				
管理費	5,830	2,623	2,724	3,357
事業費	3,100	630	1,354	1,611
合 計	8,930	3,253	4,078	4,968
収支差益	▲ 230	1,685	1,765	359



ふきのとう文庫と私

元図書担当業務執行理事 田上 明子

私は一九八五年頃に新聞記事を見て、西区平和のふきのとう文庫を訪ねた。あれから三十六年。大好きな図書館の仕事を続けられたことに感謝したい。

平和での文庫は、開館日が週二回で郊外だったこともあり、利用者が少なく、図書係は常に二〜三名位だった。私はたまたま、転勤や引越などがなかったため、三十六年間続けてこられた。(途中、けがや病気で休んだりしたが...) この三十六年間は、二十〜三十人の人々(学生さんも含め)が図書係のボランティアとして支えて下さった。

一九八五年〜一九八七年頃、ボランティア初心者だった私を指導して下さった原口さん、新野さん、湯川さんたち。

一九八八年、文庫から図書館へ変わる過程で分類・ラベル・図書カードなどの作成を提案して下さった、高校図書教諭の後藤先生。

一九八九年頃、カード作成分類などの作業を一緒にがんばって下さった椋平さん、有田さん、杉本さん、明石さん、篠尾先生など...

一九九七年頃、利用者を増やそうと、ポラーノやえぞりすクラブに出張貸し出しをしてがんばって下さった明石さん、佐々木さん。かわいイラストなどで書架の装飾を工夫して下さった福原さん。そして日曜日担当の篠尾先生、平山さん、斉藤迪子さんなどは火曜日とはちがいが、図書の返却作業など忙しかったとのこと。私た

ちとは違う、ふきのとう文庫の様子も後で知った。

そして二〇一三年、中央区への移転準備スタート。図書室書架の設計など打ち合せ、蔵書の箱詰めなどをスタートしたが、残念ながら私は二〇一三年九月〜二〇一四年五月まで病気のため長期休止し、一番大切な時期に休んでしまったが、再び新しいボランティアの仲間に入っていたいただき、図書館の仕事を続けることができ、本当に幸せだ。

図書担当業務執行理事 杉山 一夫

田上さんが平和の時の話をしてくださるので、私は文庫が桑園に移転してから、お手伝いをするようになったことを私の目線でお話したいと思います。私がふきのとう文庫の存在を知ったのは、ある日何気なく新聞を読んでいた時でした。今度桑園に西区平和から子ども図書館が移転してきて、ボランティアを募集しているとの記事に、これだ！これがこれから私がやりたい事だ、と妻と二人で説明会に行きました。妻は三年くらい前に都合がつかず活動出来なくなりましたが、私は何とか今日まで続けさせていただいています。

私がなぜこれだ！と思ったのかももう少し退屈な話をしますと、私の定年と同じころ東京に暮らす長女家族の支援が必要になり、二年近く東京で仮住まいし、妻と保育園児の孫の世話をし、ヨレヨレになって札幌に戻ってきてみれば、膝の上で絵本を読むのを聞いていた孫に会えない淋しさ、私自身が絵本のすばらしさを再認識していた頃で、新聞記事はまるで天の啓示のよ

うに思えたのです。

そして多目的ホールで説明会があり、たくさんボランティアの中に加えてもらうことができました。ただ、開館まで時間がなく、リハールらしいことがあまりできなかった記憶があります。

そしてついに二〇一四年二月二十三日午後一時、「障害のある子どもでも本に親しめる図書館」と取材に来たテレビ局が紹介した現図書館がオープンしたのです。

大変な混雑ぶりでカウンターの前は、登録し、貸出カードを作る人、そのあと貸出を受ける人の順番待ちであふれ、テレビ局のカメラがまわる中、この地に図書館ができた喜びを来館者のもとより、我々ボランティアも感じる事ができたのです。

現在、開館日は日曜日から水曜日の四日間、途中から開館時間を延長し、午前九時半から午後四時までとなっていて、今ではすっかり地域になじんんでいます。

さて、私自身ボランティアをさせてもらって、ボランティア仲間と交流することで、視野が広がり、ほかの活動にもつながっていききました。たとえば、司書の勉強をして資格を得たこともそのひとつですが、昔の私には想像もつかないことが次々起こり、自分でも驚いています。

長々と自己中心的なことを話しましたが、振り返れば当初のボランティアも減り、いつの間にか入れ替わりもあります。平日働き、貴重な休みの日にボランティアに来てくださる若い方もいます。入れ替わりは宿命だと思えますが、小林静江さんの理念に基づいた文庫が今後も長

く続いて、より親しまれていくことを祈っております。

布の本担当理事 柳原 裕子

三十年位前「ちようちよう」と合同で作業し、布の絵本製作の単独のグループとなり、文庫の庭の満開のルピナスの花から、「るびなす」との活動になり現在に至っています。現在は十人で、平和の滝からより移転後からの参加組の方が人数多くなりました。本を製作者七名、毛糸セーター・グローブ製作一名、コロナ禍での加入された方も頑張っています。皆で楽しみながら活動しています。

拡大写本担当理事 山本 淳子

ふきのとうこども図書館は五十周年を迎えました。私が文庫と出会った頃、西区平和に文庫があり、その頃と今を思うと複雑な気持ちになります。拡大写本も環境が変わってたくさんの方々と関わる事が出来るようになりました。それはこの活動にとってとても大切なことだと感じています。

私達拡大の活動は来年四十周年を迎えます。発足当初の弱視の子ども達のための本づくりは全くわからないことばかりだったそうです。文字を大きくするのは手書き・絵に着色するのも手ぬりでしていました。（色ぬりは今もしている本があります。）

製本は印刷会社に見学に行って教えてもらったと聞いています。そして「本のつくり方」の丁寧な説明書が作られていて、私がボランティアで来た頃はそれを見ながら製本をしていま

た。

私達の活動は弱視の子ども達のための本づくりです。で日頃接することのない子ども達を想像しながらの活動でした。正式な製本で作られた拡大本は表紙が堅く一冊が重たい本になってしまします。そして文字を大きくするため一冊の本が二冊・三冊と増えてしまうので子どもには持ち運びが不便になっていました。そこで表裏に厚紙を使わずに、教科書のように表紙がしなるようにしました。また弱視の子ども達は見え方が一人一人ちがうという事を知り、文字の大きさや太さ等への配慮が必要であることを聞いて明朝体よりはゴシック体が見やすいこと、一文字の大きさもあまり大き過ぎても見づらいこと、行間や文字の間も詰め過ぎず、あけすぎないこと、白い紙に黒い文字では反射が強すぎる事、支援学校の先生方よりアドバイスをいただき、徐々に読みやすくなったかな？と思える本づくりが始まりました。製作する本もはじめは絵本が多かったのですが、夏休みの読書感想文が書けるような本のリクエストもあって児童書も幅広く選本して製本するようになりました。中でも子ども達の勉強や読書に必要な漢字についての拡大本は通級指導ひとみの教室のお母様方から弱視児が自分で見て練習ができる漢字の本があるといね！の要望から製本することになりました。当時パソコンを使いこなせるボランティアさんが少なく、漢字の教科書を小学一年生から六年生まで、小学一年生から三年生までには書き順を付けたためその入力は大変でボランティアの方にはとてもご苦労をおかけしました。その後、筑波大学附属視

覚特別支援学校の宇野和博先生に漢字本の紹介をしたところ、富士ゼロックス社会貢献のお力をお借りして、DSF（ドキュメントサービスフォーラム）の皆様のご協力で、中学生の漢字（上・中・下）も含めて年に一回、全国の視覚支援学校の生徒さんに無償で配布されています。漢字の勉強は小学校に通う子ども達の共通の悩みです。小学三年生からはその数が増えてとても大変です。弱視の子ども達にもあきらめないで覚えてほしい。中学校、高校への進学に向けて活用してもらいたいです。

このように私達の活動は支援校の先生方やその活動を支えている多くの方々との繋がりがあること、活動が大きく活かされていることを強く感じています。文庫だより一二二号に掲載しました札幌視覚支援校・中部部の皆さんの社会見学でふきのとう文庫を訪問してくださることなどは私達が子ども達との繋がりがなかった時のことからくると、とても大きな変化と感動です。

今後私達の活動に皆様のご理解をいただき、子ども達との繋がりを大切に拡大写本も五十年を目標に行きたいと思います。

最後に、この度文庫の五十周年記念号として文庫だより一二五号が発行されることとなり私達の拡大本を活用してくださっている通級指導ひとみ教室の下村先生よりお祝いのお言葉と私達との関わりを先生のお立場からのお話をしていただきました。お忙しいなか温かいお言葉を本当にありがとうございました。

現在のボランティアさんから

令和三年九月現在、図書、布の本、拡大写本のそれぞれのグループのボランティアは総勢一〇五名（さらに催事の十三名が加わる）が活動を続けています。数十年の大ベテランから、ここ数年に始めた新人さんまで様々な人がそれぞれの想いを持って参加しています。その人たちから五十周年にあたり一言いただきました。

◆図書 桑原 佳子

小学四年生の誕生日に、姉が「足長おじさん」の本をプレゼントしてくれた。夢中になって繰り返し読み、時には、アボットになった気分でした。怪人二十面相や怪盗ルパンにハラハラ、ドキドキし、少女小説を読んで涙し、本を読むのが大好きになっていった。

私の一週間は、日曜日のふきのとう文庫でのボランティアから始まる。毎週、自分が借りる本を選ぶのも楽しい。子ども達の声に元気をもらい、沢山の本に囲まれて過ごすこの時間は、掛け替えのないものになっている。

◆図書 松井 紀子

五十周年おめでとうございます。銀行でふと手に取ったボラナビのご縁から始まり、木の温もりや手作りの優しさに溢れた空間に魅了され、理想のことも図書館がここにあるとの思いで、これまで二年間、活動を共にさせて頂いております。五十年に至るまでのご先輩の皆様のご尽力、礎を築かれた小林静江様の尊い志に思いを馳せ、その重みを感じ、この歴史が未永く続いていきますように、皆様と共に楽しく活動が続けていけたらと思います。

◆図書 太田 光枝

自閉症スペクトラムの娘を社会参加させたいと考えていた時「ふきのとう文庫ボランティア募集」という告知をボラナビで見つけ、読書好きの娘にできることがあるのではないかとまだ平和にあったふきの

とう文庫を訪ねました。他の人とは少し違う娘と付き添いの私をボランティアの皆さんに受け入れていただき、今日まで続けられている事に感謝しています。

◆図書 金山 聖子

その昔、私がまだ若かりし頃、初めてお目にかかった眼光鋭き小林静江さんの強烈な印象。それは、信念の人です。

信念の人小林さんが立ち上げられたふきのとう文庫が五十周年、半世紀。おめでとうございます。感慨深いです。

時代が変わり、人が変われども、小林さんの思いが変わることなく受け継いでいつて欲しいと思います。私達図書ボランティアもその思いの一端を担えたら嬉しいですね。

◆布の本 ちようちよう

刈部ミネ子 山本 好枝

平和の滝の付近の幼稚園のお母さん方で縫い方学んでいた方々と、材料セットしていた方々が一緒のグループになり「材料セット」専門に活動に移行したグループです。

現在九名。六十代から最高齢九十才。少しでもお役にたてていられればと、頑張っています。

◆布の本 やよい

早川 仁美 中村テツ子 林 恵美子

三十六年前に参加、途中十年位のブランクの後、やよいグループに参加。今に続いています。（談 早川）平成三年頃友人に誘われて文庫へ来てから現在に至ります。（談 中村）

平成九年から友達に誘われ参加しました。グループの皆さんよりのんびり進めています。（談 林）現在三人での活動、皆七十代で少しでも長く続けたいと思っています。（皆）

◆布の本 やよい 早川 仁美

創立五十周年おめでとうございます。創立五十周年おめでとうございます。どのようなきつかけで文庫に参加したのか、忘れてしましました。中心街で活動していたやよいグループを紹介されてから、実質二十五年以上たち、

十名ほどいた最初のメンバーも今の三名まで減ってしまいました。卒業間近の三人ですが、スタッフの皆様にも助けられながら、これからは和気あいあいと活動できるようよろしくお願いします。今後も若い方に参加していただき、すばらしい作品で多くの子供達を喜ばせてほしいと思います。

◆布の本 るびなす 柳原 裕子

東京の練馬区の図書館で「布の本講習会」受講し布の絵本に興味を持ち、札幌に戻り、ふきのとう文庫を訪ねボランティアの仲間に入れていただきました。手芸が得意な人間ではありませんでしたが、沢山の事教えていただき、一冊の絵本完成した時の感激が三十年近く続けた原動力になっている気がします。仲間の人達との時間も自分にとって大事な空間ですし、係わって来た人々に感謝の気持ちで一杯です。

◆布の本 るびなす 辻村 幹子

三十年近く前、道東の中標津、町の図書館で布の絵本に出逢いました。ひよんな事から作り手側に。気づけば人生の半分近くを文庫と共に過ごしてきました。

私にとって文庫という場所は、手に取れば誰もがほんわかし、心やすまる布の絵本そのものの様な場所です。そこにはいつも共に生きてきたといえる仲間がいてくれるからです。こんな素晴らしい場所を支えて来てくださった多くの皆様に感謝あるのみです。

◆布の本 るびなす 原 哲子

ふきのとう文庫は以前から知っていましたが、新聞の記事を見たのがこの活動に参加するきっかけとなりました。

始めの頃は悪戦苦闘しましたが、今では本を作る楽しさを感じています。創立五十周年おめでとうございます。

◆布の本 るびなす 渡辺 光子

創立五十周年おめでとうございます。文庫とは知らずに見たテレビ放送「できるかな？」フェルトで作って娘と遊んだ楽しい思い出があります。その後の書店での展示会でふきのとう文庫を知

る事が出来ました。

私の母は六十才でパッチワークに出会い、老後を楽しんでいた事を見習い私も挑戦してみようと思いい見学をして入会させて戴きました。それから十三年やさしいメンバーに守られ毎日幸せな気持ちで作業しています。これからも頑張ります。よろしくお願ひ致します。

◆布の本 あすなろ 高橋 順子

グループに参加して約二十年位で、新聞・展示会で興味を持ち、手芸が好きという事と何かボランティア活動をの思いが一致して始めました。現在八名で桑園移転してから参加された方も布の絵本作りに積極的に製作されていて、楽しく進めています。

◆布の本 さくら 出村 厚子

グループ活動は約三十年位になり現在は十八名で、常時十二、三名の参加の活動です。布の本製作は十三人、販売品三人位、プレールーム三名で常時十二名位参加しています。ボランティア歴三十年位から桑園に移転後に七人参加です。他に文庫内のプレールーム・多目的ホール等の管理もしています。皆で楽しく行っています。

◆布の本 たんぽぽ 斉藤 明子

創立五十周年、おめでとうございます。展示会で、作品の愛らしさと説明して下さった方のあたたかさにひっぱられる様に参加しました。一針々々縫い進むとその可愛らしさに笑顔が浮かんで来ました。

現在は体調不良もあって、本作りは出来ませんが、修理も楽しんで出来ます。傷み具合は子供の手が触れた証し、それも感じる事が出来ます！もう少し頑張ろうと思っています。

◆布の本 たんぽぽ 鈴木 泰子

五十周年おめでとうございます。ふきのとう文庫との関わりは、以前、職場で布の本の「どうぶつ」を購入し、皆で「ページずつ」作ったのが最初でした。退職後、何かボランティアでできることと思ひ、たんぽぽグループに入りました。早いもので十年にな

ります。その間に、友人を誘ったり、仲間の方々に支えられ今日まで続けています。今後とも、ふきのとう文庫が、子育て中のお母さん、お父さんと子供にとつて居心地の良い場所となります様に祈りいたします。

◆布の本 たんぽぽ 安田 芳子

帰札して、同窓会の鈴木さんに十数年振りに再会。彼女が布の本製作のボランティアをしていることを知り、活動日に見学に行つてそのそま、チャッカリ？たんぽぽの一員となりました。文庫が、まだ西区平和にあった時何かのお知らせで布の本を置いてある施設であることを知り、手に取つて見てみた！と思ひました。小さなお子さんでも、自分の手で布の本にさわつて開いて楽しんでほしいのです。五十周年おめでとうございます。

◆拡大写本 林 仁子

創立五十周年、おめでとうございます。私が拡大写本ボランティアに参加させていただいたのは、西区平和から桑園に移転計画が動き始めた頃でした。自然豊かな環境（たびたびカメムシとの遭遇もありましたが）から閑静な住宅街へ。新しい環境の中、活動仲間も増え、楽しく活動できていることに感謝しております。

これからも、体力維持を心掛け、より多くの拡大写本が子供達に提供できたらと思つております。

◆拡大写本 石川 悦子

子どもの本が好きな私は、長年小学校や児童会館などで読み聞かせなどのボランティアをさせていただいていました。しかしもう少し見聞を広める活動をしてみたいと思つて、出会つたのがふきのとう文庫でした。

週に一度こちらでの作業時間は私にとって学びと癒やしの貴重な時間です。それはきつとボランティアの他の皆さんも同じだろうと思ひます。皆んな元気でここふきのとう文庫に通い続けることが願ひです。五十周年おめでとうございます。

◆拡大写本 原田百合子

十年ほど前、ある所で「拡大写本」という文字を

目にしました。拡大写本って何？どうも気になり、パソコンで調べていたら、ふきのとう文庫にたどり着きました。「すべての子どもに本の喜びを！」全く同感です。

図書館の本を借りて読むことも増えました。児童書だけでなく大人が読んでも感動した本が何冊もありました。いい本を書いている作家さんも知ることができました。児童書の良さを再認識でき、本がたくさんある環境で拡大写本を制作できるふきのとう文庫には感謝です。

◆拡大写本 廣野 久子

五十周年おめでとうございます。二〇〇一年頃（？）道新に掲載された記事を見て直接文庫に伺いお手伝いを始めてから二十年経ちました。百冊を超えてると思ひます。以前、機会があり△△小学校に行つた時、私の色ぬりした絵本がありました。お手伝いした実感が湧いたものです。これからも好きなの事なので文庫で要望がある限り続けさせていただきますと思ひます。

◆拡大写本 沢田ときえ

私の場合色ぬりをやられている方が近くでした。その方が忙しい時手伝つたりして興味をもち、しばらくして私の分も送つて頂くようになっていてドキドキしながら画たのが思ひ出されます。いつも完璧とは思ひえないものも受け入れて頂き、うれしく思ひます。五十年とはすごいですね。私は半分をいつていませんがこれからも楽しみに画かせて頂きたく思ひます。受け入れてくださつたふきのとうに感謝です。

◆拡大写本 内野知恵子

ホテルで茶話会が開かれました。大勢の参加者に圧倒されました。欠席者も含めた大所帯。子供達誰もが手を伸ばすと本があり、触れて、見て、読んで迎えます。おめでとうございます。これからの活動が続いていくことを願ひます。微力ながらも少し手伝わせて下さい。私は、「子供の為」にと当初は思ひ上つていました。がいつからか「自分の為」だと気づきました。ありがとうございます。これからよろしくお願ひ致します。

ふきのとう文庫のあゆみ

当文庫は前理事長の故小林静江さんが自宅始めた子ども文庫を開設してから、昨年で五十年が経ちました。その長いあゆみを振り返ってみます。

1 一九七〇年 身障児専用の子ども文庫

前年に夫の転勤で東京から江別市大麻に転居した小林は東京時代と同じく自宅を開放して子ども文庫を開いた。脊椎（せきつい）カリエスで二十五年もの間寝たきりだった妹を思い、様々な障がい児支援の方法を考えていた小林だが、自宅でも文庫をしていてかなりの蔵書があることなどから、自分にふさわしい支援の方法を考えていた。それは、なんらかの障がいを持つため就学猶予、就学免除になつて義務教育から遠ざけられた子どもたちや辺地の寝たきりの子どもたちに本を郵送で貸し出すということであった。当時の北海道は図書館空白地帯が多かつたし、半年は雪に閉ざされる長い期間がある。そこでまずは自宅を身障児専用の子ども文庫に切り替えることを決意した。

2 郵送貸し出し等の試み・郵便料値上げ、図書館の身障者サービス状況の調査

自宅での身障児専用の子ども文庫とともに、在宅身障児を訪問して本を持参すること、あるいは郵送での貸し出しをしようと行政・各種団体に打診したが、なかなかいい回答は返ってこなかった。在宅療養の子どもに本を届けることの難しさを知った。そのため、新聞に投書して直接郵送費を負担しても貸し出ししようとしたが、その後郵送料金の値上げになるとの報道があり、個人の限界を超えると知った。

そこで、国内外の図書館の身障者サービスや郵便法規などを調べ、図書館に対して障がい者への家庭配本を求める運動も始めた。

3 一九七三年 病院内ふきのとう文庫開設

小樽へ転居した小林は新しい土地で心も新たにもう一度努力しようと市役所福祉課を訪れ、在宅療養の子どもたちに対する巡回相談で本利用の働きかけをしようことにした。しかし、期待通りに入るとは運ばなかった。そこで今度は、病院文庫で受け入

れてくれるところを探して奔走した。

入院中の子どもたちは屋外で遊ぶことがままならず、室内で病との戦いを余儀なくされている。そんな子どもたちの成長をたすけ、慰めるためにも本の役割は大きいと思つた。そんな中、一九七三年十一月に小樽市立病院が受け入れてくれることになり、小児科プレイルームにふきのとう文庫第一号が開設された。今から四十八年前のことである。

寒い冬に耐えて雪の下から春一番に芽をふく「ふきのとう」を思い、また子どもたちへの励ましも込め「ふきのとう文庫」としたのは、この時からである。それ以来、道内にとどまらず、日本全国の病院・施設内「ふきのとう文庫」は三十カ所を超える広がりを見せた。

4 一九七六年 布の絵本

小樽市立病院のふきのとう文庫で貸し出しをしていた頃、全盲の二歳児の母親から、「うちの子は、耳は聞こえるから何か読んでやりたい」との相談を受けた際、何冊かの絵本を選んで、東京の点字奉仕グループが作った「さわる絵本」も用意した。「さわる絵本」とは、絵本を原本として、台紙に絵の部分と布・紙・ビーズなどで半立体的貼り絵にしたものであった。これは弱視の子どもたちは喜ぶが、全盲の子どもには研究の余地があるという報告もあつた。

脳性小児麻痺の子どもを持つ親から、「なかなかうちの子どもにあつた本がない。自分で作ろうと思う時間が長い」という相談を受けた。そういつたことから障がいを持つため市販の絵本が適当でない子どもたちのための本作りを考え、資料を集めた。

その頃、アメリカの「布の絵本」BUSY BOOKが紹介された。それは天竺木綿の台布に、フェルトで三角形のテントがアップリケされて、ファスナーで開閉できるなど、カラフルで楽しい工夫がある手作りの本だった。



一九七六年に「布の絵本」は新聞、テレビで取り上げられ、札幌市のボランティアコーナー

で開かれた「布でつくる絵本研修会」の講師をふきのとう文庫が担当し、布の絵本製作の機運が高まり、文庫としてのりだすこととなった。

5 一九八一年 拡大写本の作成

読書の楽しみから遠ざけられている子どもたちの中には、弱視児と呼ばれる子どもたちがいる。めがねなどで矯正しても〇・三以下の視力しかない子どもたちである。ふきのとう文庫では、この子どもたちのための拡大写本づくりを一九八二年からはじめた。

一九七四年に創成小学校訪問学級に児童書や絵本を貸し出したとき、弱視学級も見学させてもらい、弱視児のための本作りもやっていきたいと研究をしたがなかなか実現しなかった。一九八一年に日本点字図書館の本間先生が小樽で講演したとき、かねてから布の絵本や絵本に点字を打って貼り付けた本の試作品を見ていただいて先生に助言をいただいた。だが、「小林さん、拡大写本を作ってくださいよ」と言われたことで、伸ばし伸ばしになっていった拡大写本作りの思いに火がついた。そして、翌年にはそれが少しずつ実現して現在に至っている。

6 一九八一年 ふきのとう子ども図書館完成

小林は障がい児の読書ボランティアを志したときから、小さくてもいいから障がい児の利用を主とした図書館をいつの日か建設したいと思っていた。床にはカーペットを敷き、冬は床暖房を入れ、ワゴンに本を入れて運び、障がい児が寝たままでも本を選んだり、読んだり出来るような施設を考えていた。また、障がい児と健常児の交流の場となるような「子どもの城」にしたいと夢をふくらませていた。

ふきのとう文庫の事務所が小林宅から札幌教会内明星館、民間ビルへと転々する中、一九七九年、近藤キクさんの土地百坪の寄付の申し出があつた。その頃、財団法人化して、税制上の優遇措置を受け、社会的にも信用度を増そうとしていたが、法人化するための基本財産の見直しも立っていないかつた。そこでこの寄付があり、その年に財団の申請をし、知事認可を受けたところであった。

建設資金は、三菱財団、北海道共同募金会、札幌の篤志家から各五百万円、全国各地の支援による寄付金、手作りバザーなどで営々と積み立てた資金など総額二千九百万円を背水の陣で用意した。更には

若い設計者たちが全くの無報酬で設計し、建設に当たっても利益を度外視した金額で行ってくれた。かくして「ふきのとう子ども図書館」が完成し、一九八二年六月六日開館の運びとなった。一階には読書室、プレイルーム、事務室があり、二階には作業室、収納庫がある。地下鉄琴似駅から市営バスの終点にあり、赤い三角屋根のかわいらしい建物であった。その正面の白壁には協力者でもあった故坂本直行氏による「ふきのとう」の絵が掲げられていた。

7 ふきのとう子ども図書館の活動

日本で初めての障がい児専門図書館として発足し、開館日は日曜と火曜の週二回、午前十時から午後三時までであった。館内にはエンジ色のカーペットが敷かれ、冬は床暖房も入っていた。壁面には書架が並べられたが、プレイルームのスペースを確保するために本は三千冊程度に絞って置かれた。「布の本」「拡大写本」中心の読み聞かせや、遊具で子どもたちと遊ぶこともした。障がい児の場合、一対一で本を読んだり、遊んだりすることも多かった。

時代が昭和から平成に変わっていくと、社会をとりまく環境に変化が出てきてふきのとう子ども図書館の利用も減少傾向がみられるようになってきた。利用促進への試案も考えられ実行してきた。

ふきのとう子ども図書館は単なる読書施設ではなく、プレイルームを有しており布で出来たデコレーションケーキなどの遊具もあることから、楽しい遊びの場としての役割も果たしていた。障がいを持つ子どもと地域の子どもの交流の場にしたいということで、一九八三年から月に一回「手づくり遊びの会」を実施して、現在に至っている。これは、身近にある日用品を使っておもちゃを作り、それで遊ぶというもので、文庫の来館者をはじめ地域の小学校などにも呼びかけて行っていた。

8 一九八五年 資料館・展示室設置

ふきのとう文庫を理解してもらうために、その理念と歩み、活動内容を示す関係資料や制作物を展示してあげようというスペースが必要と一九八五年に資料館をオープンさせた。寄付を受けた図書館用地と同時に買った隣接した建物付きの土地である。この古い住宅を改装して、図書館には入りきらなかった布

の絵本や遊具、タペストリーを展示したが、三年後の一九八八年に一階を「共働作業所ふきのとう」としたため、資料展示は二階に移動することとなった。狭隘であることや図書館と別棟であること（冬期間の利用が難しい）など資料館としての機能は低下していった。新しい資料館の必要性は誰もが思っていたが、資金繰りの面で設置は難しかった。その後、新規建設の目処がたち一九九九年に念願の資料館が渡り廊下で繋がった棟続きの施設として完成したが、スペースの確保が難しく、多くの情報が盛り込まれた資料館とはならず、布の絵本、遊具、タペストリーを収納する展示室として使用するにとどまった。



9 二〇〇四年 布の絵本の発展と理事長の交代

一九八二年から始まったふきのとう子ども図書館は、日曜と火曜の週二回の開館であったが、図書館というよりは、週四回の布の本・拡大写本の製作活動をメインとするものであった。優秀な制作ボランティアの育成を続けていき、その過程で出来上がった製作物を主に図書館という場を通じて活用し、ふきのとう図書館を広めていくことをしていた。

既存の絵本からも布の本にするために、原本のイメージを損なうことなく、いかに縫製しやすい形にできるかを、きちんとした型紙のための作図、細工箇所やフェルト布の色の指示などもなされていた。それらが出来上がると、最初に試作縫製し、その結果を受けて縫製グループが作り上げるという行程で多くの作品が生まれた。

小林前理事長は様々な活動を一手に引き受けていたが、高齢となり、さらにはくも膜下出血などを発症し徐々に活動が制限されていった。そんな中、現理事長の高倉が副理事長となり、仕事を代行するようになった。二〇〇二年頃には入退院を繰り返し小林は、高倉に後を託し二〇〇四年には高倉が二代目理事長に就任した。その後、各分野（図書、布の本製作、拡大写本製作）の代表が理事となり、定例的な運営会議を開催できるようになって、現在に至っている。この運営会議で重要検討事項であった公益

財団法人化についても話し合いが持たれ、様々な問題をクリアしながら二〇一一年に北海道の公益財団法人の認可を受けた。

10 二〇一〇年 図書館の移転新築構想と決定

一九八二年に開館したふきのとう子ども図書館は、二一世紀に入ると長年の利用等で経年劣化が激しくなっていた。また、設置が西区の山間に近い場所ということ、図書館利用の立地条件は良くなかったうえに、少子化の影響もあったのか利用者数は伸びないままだった。そこで理事を含めた運営会議は図書館の新築を考えるようになっていった。

高倉理事長は個人で所有していた土地（中央区北六条西一二丁目の現所在地）の一部を図書館用地に寄付することを考えていた。札幌駅から西へ一キロの中心地である。運営会議での細部の検討（資金面・運営面など）を経て、二〇一〇年に理事会・評議員会で移転決議がなされた。必要な資金は一億円を超えたが、前図書館の売却や、小林前理事長が残した内部留保資金、さらには林業促進道産材活用国庫補助金、移転のための募金などで計画が実行されることとなった。

前図書館と比べて構造・面積も同じくらいのもので出来上がったほか、多目的ホールも付加することができた。

11 二〇一四年 ふきのとう図書館移転

二〇一四年二月に新図書館は様々な問題を乗り越えながら完成した。布の本、拡大写本の製作活動はほとんど移転前の方式を継承して行うことができた。図書館は、それまでの二日の開館を二日増やし、週四日にすることができた。また、都心にあることで利用者の数は倍増した。そのため、図書ボランティアも三倍近く必要とし、補充がはかられた。現在の開館日は日曜から水曜までの週四日である。さらに、多目的ホールを設置したため、「うたう会」「おはなし会」「手づくりあそび」など子どもたちのための催しものを定例的に行うことが出来ている。

全国的にも珍しい布の本、拡大写本の作業室を常設する子どもたちのための図書館は、市内はもとより道内外からの視察も多く、遠くは沖縄、九州などからも視察・見学にきている。市の中心部に移転したために知名度も上がり、運営の考え方に共感した寄付者にも恵まれ、現在に至っている。

『手づくり遊びの会』の発足など

(斉藤迪子さんインタビュー)

現在、文庫の手づくり遊びの会などの催事を一手に引き受けてくれている斉藤迪子さんは、四十年近く様々なセクションでふきのとう文庫をサポートしてくれている現役では一番長い方です。五十周年の記念号発行にあたり、当時のことなどを教えて貰いながらインタビューしてみました。

私がふきのとう文庫と関わりを持ったのは昭和五十七年（一九八二年）の文庫の施設が西野平和に移る頃でした。それまで借りていた山京ビルが取り壊しになるためだったらしいのですが、西野平和に会館建設のための土地を寄付してくださる人がいて、昭和五十七年五月に引越しました。それまであちこちで事務所を借りて活動していたのですが、手狭な部屋での布



の本作成でした。それが自前の広い居室が出来たため、布の本作成のためのボランティアを募集し、多くの人が来てくれるようになりました。もともと、創成小学校訪問学級教室で始まった「障がいを持つ子どもと本の会」がアメリカの主婦が作った布の絵本を参考にして作った布の本で

した。障がい児と読書の関係では、この布の本の素材が既成の本にはない魅力となり、子どもたちの心を掴んだようです。私もボランティアの一人として、布の本作りに参加しましたが、会館にはたくさん本もあり、図書の方も手伝うようになりました。



それ以降、ふきのとう文庫がこの分野の先駆けとなり進んでいくことになりました。まだ社会的に少なかった布の本を一生懸命作り、今度はそれを広く発表しようと展示会も始めました。札幌の丸井デパートを始め、小樽、函館、室蘭、釧路と「布の絵本展」の開催が出来たのは昭和五十八年（一九八三年）のことでした。私もお手伝いに出向きました。

同時にどうやって布の本を作ったらいいのかということも教えるために、福祉センターなどで作成指導の場も持ちました。講習の依頼は事務局に來たので、当時の事務を担当していた上見（あげみ）さんと一緒に、各地に出かけて教えたりもしました。倶知安には三年くらい通いました。札幌市では菊水図書館で布の本作成の講習会をやっていて、その中からふきのとう文庫に來て活動するグループが出来て、現在まで

そのグループが続いています。三十年以上になりますね。

同じ頃、札幌市のボランティア講習会を受講して、何か出来ないかと考えていた人たちが、日章中学弱視教室のことを知り、弱視の障がい児のための拡大写本作りをするようになりま

す。これも作成の情報が少ない中、文庫のみんで調査研究しながら始め、現在の拡大写本のグループになっていきます。ふきのとう子ども図書館は西野平和の時から始まりました。文庫の開館日は日曜と火曜の二日でしたが、私は火曜の布のボランティアの他に、日曜に文庫の事務も手伝うようになっていました。会館運営には様々な分野のマネージメントをする人が必要です。小林理事長にお願いされたことを、色々やってきました。

図書館としては、今でこそ「すべての子どもたちに本を読むよろこびを」をモットーにしていますが、当時は障がいを持つ子ども専用の図書館と考えていました。開館したばかりの頃は、物珍しさもあり来館者は絶えませんでした。徐々に減っていき

ました。そんな時、障がいを持つ子どもと地域の子どもとの交流の場としたいという願いで、昭和五十八年（一九八三年）から月に一回、「手づくりあそびの会」を企画・開催し、私が一人で担当することになりました。子どもたちにも簡単に出来る、日常にある材料で工作すること



を考えました。月に一回ですが、材料セットを用意するのも大変で、当時、ボランティアで来ていた早瀬さんや後藤さんも手伝ってくれました。来館者を増やしたいと「うたう会」や「おはなしの会」も始めました。結構、多くの催しものがありましたよ。

西野平和の恵まれた自然環境の中、夏はキャンプ、秋はふきのとう文庫まつりをやって、バザーなどで地域のみなさんと一緒に楽しみました。中央区移転後の住宅密集地では考えられないことですね。まつりはみんな楽しんでくれたものもありましたが、当時から、運営に掛かる財源調達の意味もありました。今もそうでしょうが、公の援助もなしに独自で文庫を運営していくには、資金的な裏付けが必要ですね。

私は、中央区に移転した文庫でも、「手づくりあそび」を続けていますし、「うたう会」「お話の会」を定例としてやっています。「世界の楽器展」も毎年定例となっていました。また、医学生のみなさんのクラシックコンサートも年に一回は開いてきました。残念ながらコロナ禍の現在は、ほぼ中止となっていますが、このコロナウィルス感染が終息したら、また、色々な会を開いて、子どもたちを楽しませたいです。来年こそは元に戻るかもしれませんね。

2021年7月以降賛助会費納入一覧

石黒富美子	石黒 英彦	和泉 尚吾	伊藤 建雄
植竹 俊光	大内 和子	大倉 聡子	小笠原良次
岡田有利子	小野 祐子	小原 静香	亀井 健二
亀井 伸照	熊谷 勝宏	栗原結実子	黒木 克己

佐藤 和子	高倉 聖哉	高下 圭一	武次ゆり子
出村 良平	長岡 臣子	橋本真知子	濱崎 京子
林 規子	平井 諭	藤沢 薫	三上 節子
八島 昭雄	安井真知子	矢野 直美	吉川 秀樹
和野 徳子			
旭川布の絵本・のんの			
岩見沢友の会			
伊達ブンブン文庫			
とも育ちの森・えぞりすクラブ			
ゆずり葉の会会長・葛西 結花			

2021年7月以降寄附金納入一覧

伊志嶺美津子	井村 裕夫	高倉実枝子	藤田 宮子
矢野 直美	吉川 秀樹		
(株) 太田ファーム・太田 昌子			
北海道労働金庫			
生活クラブ生活協同組合			
ダイマツおおたき			

2021年7月以降寄贈一覧

7月11日	童心社	児童書	1冊
8月1日	童心社	児童書	1冊
8月9日	相原 沙織	絵本他	68冊
8月20日	北海道文教大学	書籍	4冊
9月17日	北海道いのちの電話	DVD	2本
10月3日	童心社	絵本	1冊
10月8日	学研プラス	児童書	1冊
10月8日	北海道文教大学出版会	書籍	1冊

10月12日	図書館ネットワークサービス	絵本	6冊
		児童書	4冊
10月17日	偕成社	鉛筆他	多数
		絵本	1冊
10月20日	葭内 充保子	児童書	11冊
10月24日	童心社	児童書	1冊

行事一覧

7月12日	開館 貸出再開	
7月16日	(ほっとたいむ)	
7月20日	運営会議	
7月25日	楽器でたのしもう	
8月8日	腹笑会	
8月22日	井上美豊子と楽しもう	
8月20日	(ほっとたいむ)	
8月24日	運営会議	
8月22日	楽器でたのしもう	
8月29日	9月29日	
	休館	
10月1日	赤い羽根街頭募金活動	
	(ほっとたいむ)	
10月3日	開館 貸出再開	
10月4日	3596・WEBマガジンのため取材	
10月10日	アコordeiオン演奏会	
10月12日	運営会議・理事会	
10月15日	(ほっとたいむ)	
10月17日	おはなし会	

賛助費、寄附、寄贈ご芳名 へ支援ありがとうございました。

—— 布の本テキスト・材料セット価格表 ——

材料セットには作り方説明書を同封しています。

テキスト No	布の絵本	テキスト	材 料 セット	テキスト No	布の絵本	テキスト	材 料 セット	テキスト No	布の絵本	テキスト	材 料 セット
11	かくれんぼだあれ	200 円	販売終了	16	まる むし	200 円	3320 円	遊具	ジャンケンサイコロ	なし	600 円
12	MY BOOK このいろなあに	200 円	3320 円 3850 円	17	ちいさいおおきい さかな	200 円	2230 円 3030 円	遊具 遊具	やさいセット(8種) くだものセット(7種)	なし	600 円 500 円
13	のりもの だれのうち	200 円	1620 円 3320 円		わっ!	なし	1720 円		どうぶつとなかよし おいしいね!	なし	1600 円 1600 円
14	Greeting おやつ	200 円	3030 円 1720 円	新作	ドレミのうた ばあ!	なし	5020 円 2200 円		おはな のりたいたな	なし	1600 円 1600 円
15	おかあさん どうぶつ	200 円	3030 円 1820 円		どんぐりころころ おむすびころりん	なし	4360 円 5560 円		うみのともだち とりのなかま	なし	1600 円 1600 円
									どうぶつだいすき とり	なし	1600 円 1600 円



ふきのとう文庫の電柱看板

二〇一四年に中央区に移転したときから、住宅街の中小路ということでも少し分かりづらくなったふきのとう文庫ですが、パンフレットなどで場所を示したり、玄関先に大きな看板を設置したりしました。それでも、分からずに電話で場所を聞いてくる人も結構いました。そこで、電柱の案内看板を申し込んで設置しました。十月に、その更新手続きの案内が来ました。こちらに移転してから七年が経ちます。経費の節減という課題もあり、そろそろ下ろしてもいいのではないかとという意見もありましたが、運営会議で話し合った結果、更新することになりました。改めて眺めてみると、可愛らしい緑色のふきのとうが「文庫はすぐそこ」と教えてくれています。これはなかなかいい感じです。

ふきのとう文庫の電柱看板

編 集 公益財団法人ふきのとう文庫
代表理事 高 倉 嗣 昌

〒060-0006 札幌市中央区北 6 条西12丁目 8

☎ 011-222-4839 FAX 011-222-4800

http://www.fukinotou.org

E-mail:fukinotoubunko@ceres.ocn.ne.jp

令和 3 年11月10日 発行

毎月10日発行一部100円（維持会費に含む）

昭和48年 1 月13日 第 3 種郵便物承認

HSK通巻596号

発行人 北海道障害者団体定期刊行物協会

細 川 久美子

あ と が き

コロナウィルス感染予防対策での二年。そんな話題ばかりを書いてきたが、ようやく出口が見えてきた感じがする。文庫の五十周年を記念する行事は、昨年来、開催の時期をうかがってはいたものの、タイミングを逸してきた。今回、この文庫だよりをもつて一応、周年の記念号とすることで区切りをつけようとしている。今後、どのような記念の行事が組まれるかも未定ではあるが、五年後、十年後、この文庫だよりを見た時に、ここに五十年があつたのだという記念誌として残ることを目指し、関係者に執筆していただいた。図書、布の本、拡大写本のそれぞれのグループの人たちと共に、これを弾みに六十年、七十年とふきのとう文庫を存続・発展させていこうとしている。

郵便振替 = 02720-3-2300 銀行口座 = 北洋銀行本店営業部普通預金 0035764 公益財団法人ふきのとう文庫

この機関誌は、“北海道共同募金会の配分”により刊行しています。
維持会員・寄付者のみなさん、ありがとうございました。